

登山道の施設整備の実態に関する比較研究

○関口 史佳〔東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科 自然環境保全学研究室〕、
栗田 和弥〔東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科〕

山岳風景地の保全と利用には登山道が大きな役割を担っている。そして登山道の管理には異なるステークホルダーが関わっていることは知られている。また、施設の種類や配置間隔、整備の度合いは地域ごと、ルートごと違うといえる。さらに、登山道施設は標準的な設計指針はあるが、例えば間距に関する基準は策定されてはおらず、それぞれの登山道で任意である可能性が高い。しかし施設配置は、設置や管理の経費、自然体験などの度合いによって適正な基準を設けることも必要であると考えられる。そこで、本研究では登山道施設の実態を把握し、それらの違いを明らかにすることを目的とする。対象地は、比較的多くの登山者が登るであろう『日本百名山』に選ばれ、自然公園指定の違いにより比較できる、雲取山、武尊山、巻機山を対象地とした。研究方法としては、実際に対象地における代表的なルートを踏査し、登山道における施設の種類、位置・標高、管理状況、そして指導標の場合にはその情報を調査した。以上の調査により、異なる山域あるいは都県によりどのくらい登山道の施設および情報の差があるのかを明らかにした。登山道の施設整備の状況を数値化することで規則性のある設置基準を定める基礎資料となると考えられた。

保健指導型ヘルスツーリズム「宿泊型新保健指導プログラム(スマート・ライフ・ステイ)」 の事業化に向けた検討

○高屋 優、荒川 雅志〔琉球大学大学院観光科学研究科〕、中村 誉、栄口由香里、松下 まどか、野村 恵里、早瀬 智文、安田 実加、村本 あき子、津下 一代〔あいち健康の森健康科学総合センター〕、矢部 大介〔関西電力病院糖尿病代謝内分泌センター〕、小熊 祐子〔慶應義塾大学スポーツ医学研究センター〕、佐野 喜子〔神奈川県立保健福祉大学大学院〕、樺山 舞〔大阪大学大学院医学系研究科〕、八谷 寛〔藤田保健衛生大学医学部〕

キーワード：宿泊型新保健指導、次世代ヘルスケア、ヘルスツーリズム

日本再興戦略では、民間事業者等が創意工夫を発揮できる市場環境の整備をし、医・農工商連携など地域資源を活用したヘルスケア産業の育成を図ることを目指すなかに、具体的施策のひとつとして糖尿病予備群を対象にホテル、旅館などの地域観光資源等を活用する宿泊型新保健指導プログラムの普及促進が提案されている。本研究では、平成27年度宿泊型新保健指導試行事業に採択された23団体・コンソーシアムにおいて宿泊を提供するホテル・旅館等事業者に対するアンケート調査を実施し、健康プログラムの実施状況および事業化に向けた課題を検討した。今後実施することは可能と回答する割合は多いなか、コスト面での課題、収益面での課題、専門家や専門機関との連携など品質面での課題が抽出された。事業化に向けた課題について観光レジャー分野の視点から考察する。

本研究は、平成28年度循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業「生活習慣病予防のための宿泊を伴う効果的な保健指導プログラムの開発に関する研究(代表 津下一代)」の一環で実施するものである。